

# The Translations of the Bible into English through the Reformation era with the Scottish Perspective

|       |                                                                                                                     |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2021-02-04<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 原田, 浩司<br>メールアドレス:<br>所属:                  |
| URL   | <a href="https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24444">https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24444</a> |

## 研究フォーラム

# スコットランドの文脈から見た宗教改革期の英訳聖書

原 田 浩 司

はじめに

16世紀の宗教改革の特徴の一つは、自国語で読める聖書を一般の人々に届けたことにある。イングランドでは自国語への聖書翻訳の歴史は14世紀から既に始まっていた。ジョン・ウィクリフ（1320頃-1384年）は聖書の自国語訳に取り組んだ最初の人物であり、後に「ロラード派（the Lollards）」と呼ばれる巡回説教団を組織して、自国語による自国民の伝道に取り組んだ。改革者ルターも聖書をドイツ語に訳したように、宗教改革にとって聖書の自国語への翻訳は非常に重要な位置を占めた事業であった。

本稿では、宗教改革期のイングランドとスコットランドにおける聖書翻訳事業を歴史的に整理し、また特に、あまり注目されることのない16世紀のスコットランドでの聖書をめぐる諸事情について解明していく。

### 1. 英訳聖書の歴史

ここではまず、ウィクリフに始まり「ジェームズ王欽定聖書（King James Version）」（1608年）に至るまでの宗教改革期の英訳聖書の歴史を概観し、整理していく。

#### 1) ウィクリフ聖書（1382年〔新約〕、1383年〔完全版〕）

聖書をはじめて英語に訳したジョン・ウィクリフは、1320年頃にヨークシャーに生まれた。彼はオクスフォード大学で学び、後に学寮長を務めるなど、35年あまりの期間をオックスフォードで暮らし、学生たちからは「福音博士」と呼ばれていた。当時のローマ・カトリック教会の腐敗を憂慮した彼は、教会の改革を願い、「ロラード派」と呼ばれる巡回説教者の一団を組織した。ギルモアは「それぞれが英訳聖書を1冊携え、人々に読み聞か

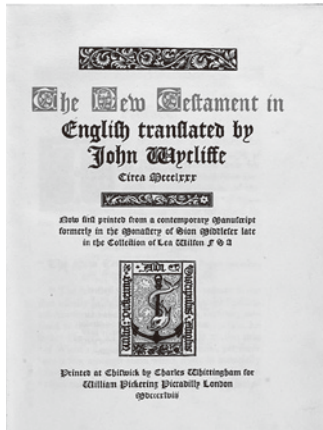


図1: ウィクリフ聖書の表紙

せて歩くように派遣した」<sup>1</sup>と述べ、彼が訳した英訳聖書がロラード派の活動の中心的な存在だったことを指摘する。彼は「聖職者か一般信徒であるかを問わず、すべての人間には自分で聖書を吟味する権利がある」<sup>2</sup>と主張していた。

ウィクリフが英訳の典拠として用いた聖書はラテン語のウルガタ聖書だった。つまり、ヘブライ語・ギリシア語の原典からの翻訳ではなかった。1382年に新約聖書が、翌1383年には旧約聖書が出版され、英訳聖書として全66巻を収録した、英国人の手による自国語で読める最初の英訳聖書となった。だが実際には、ウィクリフ

が一人で翻訳したのではなく、彼の弟子のジョン・パーベイやヘレフォードのニコラスも翻訳に従事した「共同作業」だった<sup>3</sup>。

1381年に農民たちの反乱が起きた際、その原因と責任がウィクリフに帰せられ、新約の英訳が出版された82年には、彼はオクスフォードで説教中に襲撃されるなど、彼の英訳聖書が当時の人々に与えた衝撃とその反応は非常に大きなものだった。旧約の翻訳出版を終えた翌年の1384年12月28日に、彼は礼拝中に脳卒中を発症し、その数日後に亡くなった。

その後1408年にローマ・カトリック教会はウィクリフ聖書を禁書にし、彼の英訳聖書を読む者を異端者と弾劾した。彼の死後から30年もの時を経て、1414年のコンスタンツ公会議で、彼は異端者として宣告されると、彼の遺体は墓から掘り起こされて、彼が著した書物や英訳聖書と共に焼却することが宣言された。1426年にこれが実施され、遺体は焼却されて、川に捨てられた。

## 2) ティンダル聖書（初版1525年、※1534年改訂版）

ウィリアム・ティンダル（William Tyndale: 1494-1536）は1494年にグロスター州スリムブリッジに生まれ、オクスフォードとケンブリッジの両大学で学び、特にケンブリッジで過ごした時代にギリシア語の能力を開花させた。彼はエラスムスの『キリスト教兵士の手引き』を英訳したことにより、異端の嫌疑がかけられることになった。聖職者との議論

1 A・ギルモア（本田峰子訳）、『英語聖書の歴史を知る事典』（教文館、2002年）、208頁より引用。

2 ベンソン・ボブリック（千葉喜久枝、大泉尚子訳）、『聖書英訳物語』（柏書房、2003年）、35頁。

3 A・ギルモア、前掲書、208頁。

の際に、彼は「もし神が私の命を救ってくださるなら、何年も経たないうちに、畑を耕す少年の方が、あなたたち聖職者よりも聖書をよく知っているようにして見せよう」と宣言したエピソードがよく知られている<sup>4</sup>。彼は1524年にイングランドを脱出し、ドイツ（神聖ローマ帝国内）に潜伏する。



図2：ティンダル聖書「マルコ福音書」第1章

1525年に、彼は最初、ラテン語訳のウルガタの新約聖書を英訳して刊行し、それが翌年からおもに商人たちがイングランドに密輸し、流通が始まった。その後、数回の改定が行われていくが、彼はウルガタからの英訳から、ギリシア語原典からの英訳へと切り替え、1534年に出版された最終版が、その後の英訳聖書の基礎になったと言われている<sup>5</sup>。

既に異端の嫌疑をかけられていた彼は、1535年にベルギーで逮捕されると、1536年に異端者との判決を受け、同年10月6日に火刑に処せられた。

### 3) マシュー聖書（1537年）

次に登場する英訳聖書はジョン・ロジャース（John Rogers）が「トマス・マシュー（Thomas Matthew）」という偽名を使って刊行した、マシュー聖書である。

ロジャースはティンダルの友人で、英訳の本文に関しては、ギルモアによれば、実質的には初期のティンダル訳を少し改定したに過ぎないと評されている<sup>6</sup>。ただし、右図のように、マシュー聖書は本文に対して沢山の注や他の引照箇所などが加えられた点で、ティンダル聖書とは異なっていた。マシュー聖書はギリシア語原典から訳されたものではなかったため、多くの支持を得られず、現存するのは2部のみで、歴史の中で消え、人々の記憶からも消えていった<sup>7</sup>。



図3：マシュー聖書「マルコ福音書」

4 前掲書、191頁。

5 前掲書、191頁。

6 前掲書、120頁。

7 前掲書、120頁。

ロジャーズは偽名を使って聖書を刊行したが、1555年に「血のメアリ」の治世下に捕らえられ、火刑に処せられた最初の改革者一団の一人だった。

#### 4) カヴァーデイル聖書（1538年）と大聖書（1539年）

マイルス・カヴァーデイル（Miles Coverdale：1488-1569）は1488年にヨークにて誕生し、その後ケンブリッジ大学で哲学と神学を修め、1506年にアウグスティヌス会修道院の修道士となった。彼はサフォーク州で福音主義的説教者として知られるようになり、次第にカトリック教会に対する批判を展開するようになっていった。1528年に大陸に渡り、ティンダルと合流し、彼のモーセ五書の翻訳作業を手伝った。だが、ティンダルの逮捕と処刑を機に、カヴァーデイルはイングランドに帰国した。

1538年にラテン語のウルガタと彼の英訳を対訳にしたカヴァーデイル聖書が刊行され



図4：大聖書の表紙

た。そして、翌1539年に克蘭マーの指導のもとで刊行された「大聖書」にも彼は大きく貢献した。しかし、1540年に再び大陸へ逃れ、ストラスブールで過ごし、聖書以外の書物の英訳活動に励んだ。ヘンリー8世が亡くなるまで大陸に留まり、死後に再び帰国し、1551年にエグゼターの司教に就任するも、血のメアリーが即位すると、彼は職を解かれ、大陸に3度目となる亡命を果たした。この時はジュネーヴに滞在し、そこで後に「ジュネーヴ聖書」と呼ばれる英訳聖書を作成中のウィットティンガムやノックスらとの交流があったと考えられる。彼は最終的に、エリザベス女王が首長令を出した1559年にイングランドへの帰国を果たした。

#### 5) タヴァナー聖書（1539年）

リチャード・タヴァナー（1505-1575年）による、「マシユー聖書」を改訳した英訳聖書である。ヘンリー8世に献呈されたが、同年に「大聖書」が出版されたため、ほとんど注目されることはなかった。ただ、1582年のローマ・カトリック教会訳英語聖書の新約聖書には、タヴァナー聖書の訳語が散りばめられ、大きな影響を与えた、と指摘される<sup>8</sup>。

8 前掲書、181頁。

## 6) ジュネーヴ聖書 (1557 [新約]-60 [完全版] 年)

ジュネーヴ聖書はおもにウィリアム・ウィッティンガム (1524-79 年) の働きから始まった。彼は 1524 年にチェスターに生まれ、オクスフォード大学で学び、後にダラムの大聖堂参事会長となり、宗教改革者クランマーから聖書の英訳事業を託された。「血のメアリ」の迫害により、ジュネーヴに逃れ、この地でカルヴァンの義理の妹と結婚した。また、スコットランドの宗教改革の指導者となるノックスがスコットランドに帰国するのに伴い、これまで彼が勤めていた亡命英国人教会の牧師を引き継ぐ。そして、1557 年にジュネーヴ在留英国人のための英訳の新約聖書を出版した。



図5: ジュネーヴ聖書「マタイ福音書」

彼の単独の聖書翻訳は、更なる訳文の精査と旧約への拡大を視野に、彼の他に、聖書原典に精通したアンソニー・ギルビー、クリストファー・グッドマン、トマス・サンプトン、ウィリアム・コール、マイルス・カヴァーデイルらが加わり、聖書全巻の英訳共同作業が進められていった。その成果が「ジュネーヴ聖書」として 1560 年に刊行された。

ジュネーヴ聖書の大きな特徴は、節に番号を振った最初の聖書であるという点だ。印字も読みづらいひげ文字ゴシック体からローマ活字体で行われ、広く一般に普及するようになる。なお、76 年にロレンス・トムソンが新約聖書の一部を改定した。

スコットランドでは 1579 年に一部の改訂が行われた。これまで輸入品が流通していたが、この改訂をきっかけに、改定版「ジュネーヴ聖書」がスコットランドで印刷され出版され、これがスコットランドで最初に製造された英訳聖書となった。

ギルモアはこの聖書について解説する際、その冒頭を「宗教改革者ジャン・カルヴァンとジョン・ノックスの聖書。」<sup>9</sup>とした。この二人は明らかに翻訳事業には直接加わっていないが、この二人がこの聖書をとても重用したことを、この一文は示している。特に、16 世紀のスコットランド宗教改革期において、ジュネーヴ聖書が教会の公式聖書として採用されたことは、本稿にとっての重要な関心事の一つである。

## 7) 主教聖書 (1568 年 ※ 1572 年改訂版)

1563 年に『大聖書』の改訂としての翻訳事業がエリザベス女王の命令によって開始さ

9 前掲書, 81 頁。

れた。当時のカンタベリー大司教マシュー・パーカーが中心となって、大聖書を原典と照会し、不正確な箇所を検証と改定が行われた。1572年に完全改訂版が出るまで、改定出版が続き、この最終版がジェームズ王欽定聖書の底本訳となる。この聖書は、おもに高位聖職者をはじめ、改革派系のジュネーヴ聖書の流通と使用の普及に危機感を抱く人々の側から支持を得た。

## 8) ジェームズ王欽定聖書 (1611 年)

ジョン・レノルズの企画提案によって翻訳事業が開始される。54人の聖書学者たちが6つの委員会に分かれて、分担作業で行われた。正式に1607年から翻訳事業が始まり、3委員会が旧約を、2委員会が新約を、1委員会が外典（アポクリファ）を担当して、翻訳にあたった。6つの委員会は、それぞれ2委員会ずつ



図6：ジェームズ王欽定聖書 序文

ロンドン、オクスフォード、ケンブリッジのイングランドの主要学都三か所を拠点に、委員以外の学者の見解や助言を聞くなどの会合も行われつつ、翻訳事業は2年9か月かけて

進められた。委員会が共通の底本としたのは「主教聖書」であるものの、新約聖書に関しては約80%が、ティンダルが用いた訳語に酷似している点が指摘される<sup>10</sup>。また、章ごとに「小見出し」が加えられた。欽定訳の長所は格調高い英語の表現力にあり、詩編の英詩の評価が高い。

以上のとおり、16世紀の宗教改革期にはイングランド人による聖書の英訳事業が盛んに行われたことを確認することができる。新しい翻訳

表1：英訳聖書の略年譜

| 年 代    | 備 考   | 翻 訳 聖 書        |
|--------|-------|----------------|
| 1382 年 |       | ウィクリフ聖書（新約）    |
| 1383 年 |       | ウィクリフ聖書（旧約）    |
| 1525 年 |       | ティンダル聖書（初版）    |
| 1534 年 | 首長令発布 | ティンダル聖書（改訂版）   |
| 1537 年 |       | マシュー聖書         |
| 1539 年 |       | タヴァナー聖書・大聖書    |
| 1557 年 |       | カヴァーデイル聖書（新約）  |
| 1560 年 |       | ジュネーヴ聖書        |
| 1568 年 |       | 主教聖書           |
| 1582 年 |       | ローマ・カトリック教会訳聖書 |
| 1611 年 |       | ジェームズ王欽定聖書     |

10 前掲書、23頁。

が刊行されると、古い翻訳は歴史の中に消える運命を辿らざるを得ない。しかし、英訳聖書の歴史を辿ると、新しい翻訳はそれに先立つ様々な翻訳の影響から免れることはない。A. ギルモアは特に、そのような影響史的な観点から聖書翻訳の歴史を辿ることも怠らない。

## 2. スコットランドの文脈から見る宗教改革期の英訳聖書

次に、イングランドの隣国であるスコットランドにおける宗教改革期の聖書の翻訳、および聖書事情について整理をしていく。

### 1) 宗教改革前夜の聖書事情

スコットランドの宗教改革は、1560年8月に、6人の共同執筆によって起草された「スコットランド信仰告白」が議会に提出され、全文が読み上げられ、審議の後に、そこで表明されている信仰がスコットランド国家の宗教であることが公式に採択された。この出来事が、スコットランド宗教界にとってのターニングポイントとなり、「1560年」を宗教改革の始まりと位置付けている。そして、この1560年は、スコットランドのプロテスタントが愛用した「ジュネーヴ聖書」が刊行された年でもあった。

イングランドでは1560年以前から、聖書の英訳事業が盛んに行われていたことは、先に確認した通りであるが、この年より前のスコットランドで、英訳聖書はどのような位置づけにあったのかを確認しておく。

まず、ティンダルの新約聖書が出版されたのが1525年であるが、1526年にドイツで出版されたティンダル訳の新約聖書が、1527年の初頭にスコットランドに持ち込まれていたことが確認されている<sup>11</sup>。1528年にはスコットランド宗教改革の先駆者パトリック・ハミルトンが「自国語訳聖書を用いて神の言葉を開示（オープン・アクセス）することを提唱し」<sup>12</sup>、さらに「誰でも神の言葉を読む、とりわけ新約聖書を読むことは合法である」<sup>13</sup>と教えたという罪状により火刑に処せられた。この時、ハミルトンが所持していた聖書は不明だが、ティンダル聖書である可能性は高い。このハミルトンの処刑の事例が暗示するのは、20年代終盤からの英訳聖書が急速に普及していたことである。英訳聖書の普及に危機意識を抱いた当時のローマ・カトリック教会は、国王と議会に働きかけ、1536年に議

11 P. Ellingworth, 'Bible (Versions, English) in Scotland', *Dictionary of Scottish Church History and Theology* (ed: Nigel M. de S. Cameron), IVP, 1993, 73.

12 Ian P. Hazlett, *The Reformation in Britain and Ireland: An Introduction*, T & T Clark, 2003, 36.

13 P. Ellingworth, op. cit., 73.

会はスコットランド全土の英訳聖書をすべて焼き払うよう、法令を交付した。マシュー聖書の刊行が1537年であることから、この法令の交付の時点で、マシュー聖書は流通していない。つまり、20年代から36年までに刊行された聖書は、ウィクリフ聖書とティンダル聖書の2つしかなく、宗教改革以前の時期に、スコットランドの改革の先駆者たちが利用していた可能性のある英訳聖書は絞られてくる。

さて、英訳聖書の所持の禁令に即して、ハミルトン以降もスコットランドでは多くの人々が処刑された。1539年には、アウグスティヌス会の修道士が英訳聖書を所持し、ローマ教会と議会の法令に明確に違反した廉で、エジンバラで生きたまま火刑に処せられた。30年代は、こうした激しい弾圧が繰り返されたが、同じ頃、イングランドではマシュー聖書(1538年)、大聖書(1539年)が相次いで出版されていた。その後、1543年に議会はこの法令を廃棄し、自国語の聖書、または英訳聖書の所有の自由を容認することになったものの、ローマ・カトリック教会は信徒が英訳聖書を所有することは重罪にあたる、との立場を取り下げなかった。

以上の様に、スコットランドでは1560年以前に、自国語または英語に翻訳された聖書に対する厳しい禁令が敷かれていた状況を確認することができる。

## 2) ニスベット聖書(1520年)

さて、16世紀スコットランドでは、自国語への翻訳事業がまったく行われなかったわけではない。1517年にルターによって95箇条の提題が掲示され、ヨーロッパ中に宗教改革のうねりが広がり出した1510年代後半に、スコットランド人マードック・ニスベット(1470?-1558年)によって、すでにスコットランド語への翻訳が試みられていた。

ニスベットのキリスト教的背景にあるのは、ウィクリフの影響のもとで結成された巡回説教団である「ロラード派」だった。ニスベットはウィクリフ聖書を所持していた。彼は



図7: ニスベット聖書(最初のスコットランド語訳)

ティンダル聖書(1525年)よりも5年も前に、1520年に『スコットランド語の新約聖書(The New Testament in Scots)』を出版していた。これはギリシア語原典やラテン語のウルガタから訳したのではなく、あくまでもウィクリフ聖書を部分的にスコットランド語に置き換えたものである。変更箇所もそう多くはなく、ウィクリフ聖書で使われていた単

語の一部, 具体的には ‘mirk’ が ‘derk’ に置き換えられ, ‘ire’ が ‘wraththe’ に置き換えられる, といった具合の部分的な変更に過ぎない<sup>14</sup>。

しかし, このように, スコットランド人の手による, スコットランド語訳への取り組みが行われていたことも忘れてはならない。なぜなら, 改革前のスコットランドで, このニスベット聖書が使用されていた可能性も否定できないからである。

### 3) ジョン・ガウとジョン・ハミルトン

聖書のスコットランド語翻訳に注目する際に, 見落としてはならない人物がジョン・ガウ (John Gau : 1495-1553?) である。彼は, 現在のスウェーデンのマルメーでスコットランドからの移住者共同体のチャプレンをしていたと考えられている人物だ。彼はオランダ人クリスチーン・ペダーセンが書いた宗教改革文書『天国へ至る道 (*Den rettevey till Hiemmerigis Rige*)』(Antwerp, 1531) をスコットランド語に翻訳出版し, 更に『天国への正しい道 (*The Richt vay to the Kingdome of Heuine*)』を 1533 年に出版した。この翻訳書は全編がスコットランド語で書かれた最初の宗教改革文書とみなされている<sup>15</sup>。

聖書翻訳という文脈の中で, このガウに着目する理由は, これら宗教改革に関する翻訳の中には数々の聖書の言葉が引用され, それら聖書の言葉がガウによって訳されているからである。つまり, 聖書が断片的に, 彼によってスコットランド語に訳されているのだ。

こうした, 断片的な聖書箇所翻訳も含めれば, 1552 年にジョン・ハミルトンによって出版された『教理問答書 (*Catechism*)』にも, スコットランド語の聖書箇所が散見される。ハミルトンはセント・アンドリュースの大司教を務めていましたが, 宗教改革に賛同していた人物だった。聖書全体ではないが, 断片的にはスコットランド語に訳されていた。

事例として, 聖書本文中の「主の祈り」の前半部について, ニスベット訳とガウ訳を比較してみよう。

#### 主の祈り (1880 年 プロテスタント訳より)

天にまします我らの父よ,  
願わくは, 御名をあがめさせたまえ,  
御国を来たらせたまえ,  
御心の天になるごとく, 地にもなさせたまえ,

14 David F. Wright, ‘The Commoun Buke of the Kirk’: The Bible in Scottish Reformation, *The Bible in Scottish Life and Literature* (ed by David F. Wright), The Saint Andrew Press, 1988, 156.

15 *ibid.*, 157.

我らの日用の糧を今日も与えたまえ。(以下略)

<ニスベット訳>

Our fader  
that art in heuenis, hallewit be thi name,  
Thi Kingdom come to,  
Thi will be done in erde, as in heuen,  
Gefe to vs this day our breid ouer vthir substance….

<ガウ訳>

Our fader  
thow quhilk is in ye heuine, thy nayme mot be hallowit,  
thy Kyngdom mot come,  
thy wil mot be dwne in ye zeird, as it is in the heuine,  
giff wsz this day our dailie breid….<sup>16</sup>

両者を比較すると、共通点と相違点を確認することができる。「父」は共通に「fader」(英: father) と、「糧」も共に「breid」(英: bread) と綴られるが、「天」をニスベットが「heuenis」と、ガウが「heuine」(英: heaven) と綴っている。他にも「汝(あなたの)」ではニスベットが「Thi」, ガウが「thy」といった具体的に、日本語の「イ」または「アイ」の発音に対して、ニスベットは「i」を、ガウが「y」を使用する傾向にあるのが確認できよう。こうした、言語表記上の若干部の相違は16世紀の文献を読む限り、決して珍しいことではない。

いずれにせよ、こうしたスコットランドの一般市民が使う言葉に聖書を訳す事業は、スコットランド人の手によって行われていた点を再確認したい。

#### 4) 改革者ジョン・ノックスと英訳聖書

最後に、スコットランド宗教改革の指導者ノックスと聖書との関係を確認しよう。

ノックスはジュネーヴ滞在時からジュネーヴ聖書(新約)を使用しており、帰国して、宗教改革を果たしてから、1560年に出版されたジュネーヴ聖書完全版を使用していた。しかも、1568年に議会がジュネーヴ聖書の使用認可を決議すると、その後、スコットラ

---

16 ibid., 158.

ンドの改革教会（プロテスタント）では「ジュネーヴ聖書」が公用聖書として活発に利用されていた。このように、ノックスと聖書の関係を巡っては、彼が聖書に関しては自国のスコットランド語に固執しなかったために、イングランドとは対照的に、聖書翻訳や聖書注解書の執筆事業が積極的に行われなかった点を指摘することができよう。

ただし、ここである疑問が生じる。例えば1565年にノックスが語ったイザヤ書26章の説教が残されているが、彼がその説教で引用した聖書の言葉は、ジュネーヴ聖書の言葉遣いと合致しないのだ<sup>17</sup>。つまり、ノックスはジュネーヴ聖書以外の別の聖書を用いていたと考えることもできるし、おそらくは複数の翻訳を参照しつつ、聖書原典から自分なりに翻訳をしたとも考えられる。

ノックスと聖書の関係を考えるうえで、興味深い一つの最新情報が私のもとに届いた。それは2016年9月21日付けでグラスゴー大学図書館が発表した「ジョン・ノックス所蔵の旧約聖書の発見」<sup>18</sup>の知らせである。これは、グラスゴー大学史料センターのスタッフが、これまで詳細が不明だった聖書が、かつてジョン・ノックスが所持していた聖書であることを突きとめた、

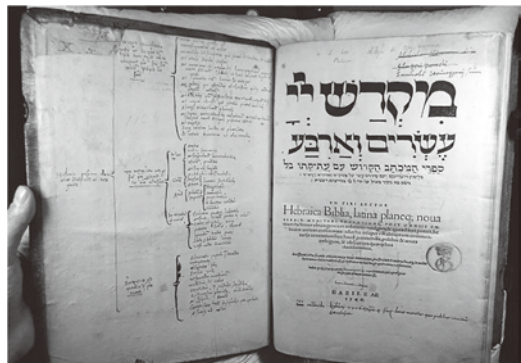


図8：ジョン・ノックス所蔵の旧約聖書1

いう報告だった。その聖書は1546年にスイスのバーゼルで出版されたラテン語とヘブライ語が併記されたもので、表紙の反対側に1561年付で改革者ノックスのものと思われる署名（サイン）が記されている（図8）。

報告書によると、この聖書は1874年に、聖書の収集家ウィリアム・ユーイングの死去に伴い、当時「現存する最大級の聖書コレクション」として彼が所有していた約3,000冊もの聖書蔵書の一部として、グラスゴー大学に寄贈されたものに、この書が含まれていたというのである。持ち主のユーイングがこの書を入手したのは1864年、ロンドンの書店主エベネザ・パーマーからであり、このことは本書のカバー部に挟まれていた書店主のパーマーの直筆の手紙によって確認することができた。その手紙に書かれていた一文に、「最も興味深いのは、手書きの記述があり、しかもそれがジョン・ノックスによるものだ

17 *ibid.*, 170.

18 <https://universityofglasgowlibrary.wordpress.com/2016/09/21/john-knoxs-bible-discovered/>（関連写真図像は左記のサイトからの転載である。）

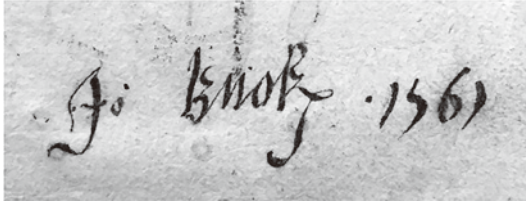


図9：ノックスの署名

という点だ」と記されている。実際、この書物には歴代の所持者の署名が残されており、16世紀の所有者の署名に「Jo Knokes 1561」（図9）が確認できた。

この署名が実際に改革者ノックスの署名で、この聖書が実際にノックスの所持していたものであるのかについて、エジンバラ大学の16世紀宗教改革を専門とするジェイン・ドーソン教授に鑑定を依頼した。結果を、ドーソンは次のように答えた。

「ノックスは生涯にわたり、16世紀の重要人物たちと同様に、多様な異なる署名を使用し、違う書き方をしました。このラテン語/ヘブライ語併記の旧約聖書で、彼は自分のクリスチャンネームである「ヨハネ」のラテン語表記「ジョー」を用いたと考えられます。ノックスの綴りで二度目に登場する「k」は、通常の彼の書き方ではありませんが、これは彼の同時代人によって広く使われたものでした。旧約聖書の署名はノックスが初期の頃にしていた公式のスタイルに共通に見られます。1560年代初頭に英語やスコットランド語で書いていた「書記的スタイル」とは異なります。ノックスのものとして知られる署名と合致しない点ではありますが、同様にノックスのものではないと言い切るだけの証拠もありません。」

つまり、署名だけからは、積極的に否定することも、また肯定することもできない、との解答であった。またこの聖書の入手方法の可能性について、続けてこう答えている。

「この本が1556年の時点でベルンのウルリヒ・キバーツの蔵書だったのですから、その5年後にノックスが所持していたのなら、それがスイスのどこかの町か、かの有名なフランクフルトの書籍市場で購入されたのかもしれません。ノックスがスコットランドに帰国したのは1559年ですから、大陸の友人か代理人に自分のために買い求めて、スコットランドに郵送してくれるよう依頼していた可能性もあります。1561年の初夏にカルヴァンからノックスにジュネーヴから送られた手紙に添えて、この旧約聖書が送られたのかもしれません」。

また、ドーソンは次のように述べる。

「1550年代に大勢のプロテスタント亡命者たちはスイスやドイツのプロテスタント諸都市に逃れ、彼らはしばしばこの機会をヘブライ語の習得のための絶好の機会と見なしました。ジュネーヴの亡命時期に、ノックスの非常に近い友人の一人だったアンソニー・ギルビーは「ジュネーヴ聖書」（初版 1560）の翻訳グループで指導的役割を果たしたヘブライ学者でした。おそらくギルビーはノックスに対してもっとヘブライ語に精通するよう促したことでしょう。大陸での亡命を余儀なくしていた期間、ノックスは多忙を極め、何度も引っ越しました。彼はスコットランドに帰国し、エジンバラのセント・ジャイルズ教会の牧師に任命されたので、自らのヘブライ語の学びを継続する有効な手立てとして、ラテン語／ヘブライ語併記の旧約聖書を入手したかったのかもしれませんが。たとえもしヘブライ語の学習が思うようにいかなかったとしても、ノックスが聖書原典の言語や旧約聖書に関する最新の研究成果に関心を寄せていたことは明らかです」。

「ノックスは、友人であるジャン・カルヴァンやテオドール・ベーズのようなジュネーヴの改革者たちのような、優れた言語学者でも翻訳家でもありませんでした。説教を準備する際に、ノックスは自分の手元にある聖書の原文を釈義し、できる限りその適切な意味内容を読み取り、さらに、他の英訳聖書や注解書を好んで用いたことでしょう。彼はヘブライ語とラテン語併記の旧約聖書を喜んで所持し、利用したことでしょう。したがって、グラスゴー大学が所有するこの素晴らしい、非常に興味深い書物は1561年以降、ジョン・ノックスが所持していた可能性は非常に高いと思われます」<sup>19</sup>。

このようにドーソン教授は、最終的な報告として、状況証拠などを鑑みれば、断定はできないものの、ノックスが所持していた可能性は極めて高い、との結論を出すに至った。

以上の最新報告から分かることは、宗教改革時代に聖書の翻訳が行われていく中、改革者たちは、翻訳された聖書を使用することはもちろんのこと、ヘブライ語／ギリシア語の聖書原典に立ち返りつつ、説教を語っていたと考えられる点だ。

## むすび

以上で整理し、確認できたことは、16世紀の宗教改革期にイングランド人の手によって英訳事業が盛んに実行されたものの、スコットランドでは自国語への聖書翻訳事業は盛んではなかった。しかし、スコットランド人のニスベットによる自国語訳への取り組みは、

19 以上、ドーソンの言葉は同サイトからの引用。

確かにウィクリフ聖書の用語の置き換え程度だったにせよ、自国語で一般市民に聖書を伝えるという宗教改革の使命をいち早く実行したものだと言えよう。

また、その後もスコットランドで翻訳事業が展開されていかなかったのは、イングランド人とスコットランド人との間の言語的な互換性の高さにあったと言えよう。そのため、スコットランドの改革者たちは既に訳され、改定され続ける英訳を積極的に採用し、1568年以降は「ジュネーヴ聖書」を公式聖書として用いていた。それでも、最後のニュースが伝えるとおり、ノックスら改革者たちは翻訳されたテキストだけを用いるのではなく、聖書の原典（ヘブライ語・ギリシア語）やウルガタ（ラテン語）なども用いつつ、聖書を釈義し、自己流の訳なども交えて、聖書を説教していたと考えられる。

#### 図版出典

図1：オハイオ州立大学図書館のHPより

図2：セント・ポール大聖堂（ロンドン）HPより

図3：Church of Christ のHPより

図4：Wikipedia：Great Bible より

図5：Wikipedia：Geneva Bible より

図6：Wikipedia：King James Version より

図7：Wikipedia：Murdoch Nisbet より

図8：グラスゴー大学図書館HPより

図9：同上